

古活字版 源氏物語 五十三冊

上野 英子

本学図書館黒川文庫所蔵の古活字版源氏物語の本文の特色を、前回にひきつづき、刊行年次の近い伝嵯峨本や元和九年本との比較を含めて、報告する。

前報告では、「桐壺」の巻に於ける青表紙系諸本が、池田本・大島本・明融本という青表紙原本に近いとみられる群(①群)と、これに対して最も異同数の多い肖柏本・三条西家本の群(②群)と、その両群の間で揺れている横山本(③)との三つに大別できることを指摘しておいた。かつ、これら江戸初期の黒川文庫本・伝嵯峨本・元和九年本という三刊本はいずれも②に近いが、更に付け加えて言うならば、黒川文庫本は②と共に①に、伝嵯峨本と元和九年本とは②に近いことなどを指摘しておいた。

しかし、この結果は『源氏物語』五十四帖中僅かに「桐壺」一帖の本文を取り上げた場合に見えてくることで、それを以て黒川文庫本全体の性格として論ずることは出来ない。それで他の巻々についても、「桐壺」の本文を調査した場合と同じ方法で、その特徴を検討してみても、同様の結果が得られるかどうかを調査してみた。『源氏物語』全帖にわたって調査するのが最も望ましいわけだが、充分な時間をとれないので、今回は桃園文庫旧蔵の明融本が現存している「若菜上」と「若菜下」との本文を取り上げ、検討してみることにした。もしこの二帖の本文に於いても「桐壺」の本文の場合と同様の結果が得られるならば、三帖に共通するその結果は、五十四帖全体にも及ぼし得るのではないかと考える余地があることになる。まず「若菜上」の検討から始める。

若菜 上

『源氏物語大成』校異篇の「若菜上」は、大島本を底本とし、これと御物本・横山本・陽明文庫本・池田本・国冬本・肖柏本・三条西家本の各本文との間の異同を、青表紙諸本の校異欄に掲げてある。これに、明融本・黒川文庫本・伝嵯峨本・元和九年本の本文との異同を加えて、以上十二本の本文の異同状況を調査してみたところ、異同の総数は一七五七例となった。この一七五七例を検討してみても、この十二本の青表紙諸本の本文は、「桐壺」の諸本の本文の場合と同様に、いくつかの系統群に分別することが出来るのかどうか。まずこの問題からみてゆくことにしよう。

校異篇の底本大島本「若菜上」の本文は、時折極めて著しい特徴、他の青表紙諸本と大きく異なる本文になっているところがみられるようである。即ち、次の欠文七ヶ所があると校異欄にある。

① 御としのほとよりはいとよくおとなひさせ給て△校異篇一〇二六⑫▽

② ことなるをよくおほしめしめくらすへき事なり△同、一〇四一①▽

③ 御とふらひいとこちたしおくり物とも△同、一〇四三⑬▽

④ かはりたま△同、一〇四六②▽

⑤ おもひてこそ宮つかへのほとにもかたへの人／＼をは△同、一〇八八⑭▽

⑥ きこえさせ給める院もことのついでに△同、一〇九九⑮▽

⑦ とり給△同、一一〇四⑯▽

右のうち、①②③④⑤⑥の欠文は、いずれも大島本だけのもので、他の諸本には欠文となっていないものである。⑦の欠文は、大島本にもないが御物本にもない。また⑧の欠文は、大島本のみならず明融本でも欠文となっている。

さて、この欠文のある本文とない本文とを読み比べてみると、欠文のある本文は意味が通じない。例えば⑧では、

六条の院よりも(御とふらひいとこちたしおくり物とも)人々のろくそん者の大臣の御ひきいて物なとかの院よりそた
讀考てまつらせ給ける

となつて、大島本では()内が欠けている。()の中を欠いている文章は意味を通じないもので、文章の体をなしているとは言ひ難いものである。この他の六例の中には、欠文を除き前後の本文を読んでみた場合、それなりに意味の通じるものもあるが、再度見直すすと各々の部分の描写の文章として不備であることは否むべくもない。

ところで、これら欠文を補つた本文を検討してみると、欠文の前後の部分に類似表現の字句が使われていることが認められる。少なくとも①a②b③c④d⑤eに於いて、各々に、①「せ給御」「せ給て御」②「へきことなる」「へき事なり」③「り給」「りたまへる」④「おもひて」「思けち」⑤「給」「給て」という類似の字句がある。このことは、大島本の欠文は、書写の際のかかる類似の字句や文字による目移りに由来するものかと考えうる余地を与えるものではあるまいか。

しかし目移りによる脱文であるにしても、その脱文を生じたのは大島本が書写される時点であつたと断定することは出来ない。むしろ大島本の書本の段階に既に存在していた欠文を、大島本の書写者が踏襲したものではないかと思われる。そう考へうる理由は二つある。

(一) 大島本のかなり慎重な書本との校訂・検閲の態度と矛盾すること

大島本には、補入記号の中丸(○)を付けて、約一行分ほどの朱筆の補入が行間に加えられているところがある。例えば次に掲げるものがその補入の文である。

- ① 御てのいとわかきをしはしみせてまつらて△校異篇、一〇六四⑬▽
- ② けるよゝのおほえ有さまかちよういなと△同、一〇八一⑨▽
- ③ 功德をつくり給へこのよのたのしみに△同、一〇九六③▽
- ④ をみたてまつるにもかゝる人にならひていかは△同、一一一七④▽

これらは、本行と同筆と思われる筆跡であり、またこの補入の文を無視して本行だけでは意味をなさないもので、朱筆の補入で補つて読むことよつて初めて文意を成すと共に、他の青表紙諸本の本文とも一致する。従つて、この朱筆の補入部分は、本行書写の後に他本と校合して補入したものではなく、書写の際の写し落しの脱文を、再度書本とつきあわせ校訂・検閲した際に発見して、行間に補入したものではなからうか。

というのは、この補入と同筆と思われる朱筆に、次の如きがあるからである。

① みる^{か朱}とも (三オ②)

② なげくよし山^{に墨}なる (三ウ①)

③ 思^{つ朱}ゆやり (四ウ⑨)

④ は^{へ朱}やる (七オ⑦)

⑤ かた^{こそ朱}く^朱さ^朱 (一四ウ⑦)

⑥ きこゆな^{る墨}。さやうなる^{上ヲ朱デナルカ?} (一八ウ⑦)

⑦ 思^{ハ朱}さため。 (二〇オ⑤)

これらの中には、本行の「つ」とも「へ」とも読みうるものを朱の見せ消ちにして、傍に「つ」と書き、その逆に、「つ」とも「へ」とも読める本行の仮名を朱で消して「へ」とする如きがある。これらは本行の文字が「つ」か「へ」かはっきりしない字体になったので、読み違いが発生するおそれがあり、そのために検閲の際に校訂したものと恐れ、他の朱筆もこれと同類であろう(墨書②の如きは書写の際のものか)。これによると、書本による検閲の際に、かなりこまかなところまで気を配って校訂したものではないかと解されるのである。

とすると、このような訂正の跡がある以上、前述した④⑤七つの欠文も、もしそれらが大島本書写の際の写し落し(脱文)だとするならば、同じく書本による校閲の際に訂正されて然るべきものではなかっただろうか。七ヶ所の欠文が訂正されぬまま残っていたということは、これらの欠文は書本に既に存在していたものと考える方が、可能性が強いように思われる。

(二) 他の青表紙諸本の中にも大島本と同じ欠文の形をとるものがあること

この大島本の欠文④⑤⑥は、大島本独自のもので、他の青表紙諸本では全くみられぬ欠文というわけではない。その一つは御物本で、『源氏物語大成』校異篇によれば、同本も又、⑥の部分で、大島本と同様の欠文の形をとっているという。こ

の御物本は大島本より書写年代が古いとされているものである。とすると、大島本以前にこの御物本「若菜上」も、同じくこの㊦を欠文とする書本から書写したものかと思われ、大島本の欠文がその書本によるものであることを支持するかにみえる。但し、もしそうとするならば、御物本が他の㊦、㊧の欠文を欠文としていないことが不審に思われる。今、御物本を見ていないので何とも云い難いが、場合によると、校異篇の校異に誤植があつて、「御」の一字を落したものかもしれない。しばらく疑いを存しておく。

その二は明融本である。明融本は、書写年代こそ大島本とあまり変らないものの、その本文は定家本を臨模したもののグループで、青表紙本の古い形を忠実に残しているらしいと言われている。この明融本が㊦の本文を、大島本同様に欠文の形にしているのである。

加えて、大島本のその他の欠文㊦㊧㊨㊩の六ヶ所も、明融本では本来は欠文になっていたものようである。即ち、明融本の本行は、大島本同様に、㊦㊧七ヶ所全ての本文が欠けており、㊨を除く六ヶ所に於いて、本行に補入の。印を付けてその位置を示し、その右の行間にこれら六つの文章が各々「補入」されてある。その意味では、㊦のように欠文を補入していないことの方が、明融本では例外である。㊨は、御物本の㊩と同じであるかに見えるが、実はその質を異にするとうべきであるらしい。とすると、明融本の補入は、他本との校合による校訂の一端として書き入れられたものかと思われる(書写時の書き落しに気付いて行間に補入したものとしては、明融本三ウ㊦に「(おと) しめらるゝすくせあるなんいとくちお」とある。これは㊦㊧とは全く別である。校異篇一〇二七②及び補正五頁参照)。㊨は、その校訂のし落しではないだろうか。

以上(一)(二)の理由により、㊦㊧七つの欠文は大島本書写の際に生じた脱落ではなく、既にその書本までの段階に存在していた欠文に拠ったもの、と見るのが妥当なところかと思われるのである。

次に、この大島本と他の青表紙諸本との間の本文の異同はどのようになっていのかを見ることにする。まずその異同数を表示する。

第一表は、大島本を基準にして、これと残る十一本との間の本文の異同数を数えた結果である。異文の区切り方によって

第一表 大島本と青表紙諸本との間の本文の異同数

| 諸本名 | 異同数 |
|-------|-----|
| 明融本 | 132 |
| 陽明文庫本 | 240 |
| 三条西家本 | 242 |
| 肖柏本 | 248 |
| 御物本 | 351 |
| 横山本 | 413 |
| 池田本 | 466 |
| 国冬本 | 648 |

本と明融本との間には、他の諸本とは違って、抜群に近い関係にあるらしいと言えるだろう。

ではその異同の質的な関係はどうなのか、大島本と明融本との間の異同一三二例を更に分析してみると、次表のようになる。

第二表 大島本と明融本の異同の分析

| (C) | (B) | | (A) |
|-----|-------------------|-------------------|-----|
| | (B ₂) | (B ₁) | |
| 4 | 46 | | 82 |
| | 11 | 35 | |

注①(A)は接頭・接尾辞もしくは付属語の異同程度のもの。

②(B)は自立語の異同があるもの。そのうち(B₁)は(B)の中、僅か一字だけの異同によるものと、異同の有無を識別しかねるもの等である。(B₂)は(B)の中の(B₁)を除いたものの数である。

③(C)は二文節以上にわたる字句の間の異同。

④この(A)(B)(B₁・B₂)(C)という分類はこの後の表にも使用する。

右の表によれば、一三二例中半数以上の八二例は、(A)接頭・接尾辞や付属語程度の異同である。また(B)の自立語の異同四六例の中にも、音転化その他による僅か一字だけの書き違い、もしくは増減があるので、異同数として数えられるもの(例えば、大島本の「御うしろみの」△一〇四一⑧▽に対して明融本が「御うしろの」△18オ⑨▽とあるものなど)が三三例、異同の有無が明確でなく、止むなく異同として採り上げたもの(例えば、明融本には「おもひくまなき」△88ウ⑥▽とあるのが、諸本の中には「思ふくまなき」△伝嵯峨本79オ⑤▽としたものもあり、然るに大島本には単に「思くまなき」△二〇二⑩▽とだけあって、「おもひ」か「おもふ」か判別できないものなど)が二例、つまり(B₁)などが含まれている。これらは、

本文の系統に異同がある、即ち異本関係の本文の異同ではなく、書写者の書写に際しての不注意等による誤脱である可能性が強く、等しく異同とは言っても本文の系統を分別するほどのものではない、そういう意味では表面的な異同と言い得るだろう。

このような例を除くと、あとに残るのは(B₂)の一一例に(C)の四例を加えた、僅か一五例だけということになる。そして特に注目すべきことは、その一五例の中には、前述したような大島本と明融本との関わり合いの深さを示すものかと思われる(a)(b)(c)(d)(e)(f)(g)の六例も含まれているのである。

以上のように考えてくるならば、大島本と明融本とは、異同の量からしても又異同となつてゐる各例の質からしても、やはり同一の群であろうと判断されるのである。

次に、その他の諸本についてみてみよう。群別できるか否か、再び第一表に戻り眺めてみるに、陽明文庫本・三条西家本・肖柏本の三本がほぼ同じような数値(上から順に二四〇・二四二・二四八)で近い関係にあるが、またこの三本は大島本からは遠く離れている。そこでこの陽明文庫本・三条西家本・肖柏本の三本に注目して、それらと諸本の本文との異同数を調べてみたのが第三表である。

この表によれば、この三本は、三本相互の異同数と、大島―明融本群との異同数とがいずれも二百台でとどまっているのに対して、池田本・御物本・横山本・国冬本との異同数は三百から六百台に達している。数値と順位に多少の差違はあるものの、三本ともに、池田本・御物本・横山本・国冬本とは一線を画していると言えるだろう。

| 〈肖柏本〉 | | 〈三条西家本〉 | | 〈陽明文庫本〉 | |
|-------|-----|---------|-----|---------|-----|
| 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 |
| 三条西家本 | 241 | 陽明文庫本 | 224 | 三条西家本 | 224 |
| 大島本 | 248 | 明融本 | 236 | 明融本 | 233 |
| 陽明文庫本 | 261 | 肖柏本 | 241 | 大島本 | 240 |
| 明融本 | 282 | 大島本 | 242 | 肖柏本 | 261 |
| 御物本 | 389 | 御物本 | 338 | 池田本 | 307 |
| 横山本 | 448 | 横山本 | 409 | 御物本 | 349 |
| 池田本 | 501 | 池田本 | 458 | 横山本 | 370 |
| 国冬本 | 664 | 国冬本 | 645 | 国冬本 | 528 |

第三表 陽明文庫本・三条西家本・肖柏本と他の青表紙諸本との間の本文の異同数

そこで、かかる池田本等の諸本を別にして三本相互の関係をみると、三条西家本にとっては陽明文庫本が、陽明文庫本と肖柏本にとっては三条西家本が、各々最も近い本文となっている。従って、異同数からだけみるならばこの三本を同一群としてまとめてよきそうに思うが、実際はどうなのか。まず、「桐壺」に於いて同一群と判定した肖柏本と三条西家本との間から考え始めてみよう。

異同の質を検討するべく両本の異同二四一例を分析してみると、第四表のようになる。

第四表 肖柏本と三条西家本との異同の分析

| (C) | (B) | | (A) |
|-----|-------------------|-------------------|-----|
| | (B ₂) | (B ₁) | |
| 1 | 90 | | 150 |
| | 27 | 63 | |

すると、(A)が一五〇例、(B)の中でも僅か一字だけの相違による異文が六三例あり、かかる小異というべきもので両本の異同数の大半が占められていることが分る。それに対して、逆に、形態的には最も大きな異同である(C)に属するものは、ここでは次に示す一例のみとなっている。

たえこもり給なは世中もさためなきにやかてきえ給なは

(注) 傍線・波線筆者。傍線部、三条西家本なし。校異篇一〇九九⑦)

即ち、傍線部分が三条西家本の欠文となっているのだが、欠文の前後には波線で示したように「給なは」という同じ語句が見えており、或いは三条西家本書写者の目移りによる脱文かと思われるものである。

このようにみてくるならば、「桐壺」の巻で同一群とみなしえた肖柏本と三条西家本とは、本帖に於いても、桐壺の時より多少小異が目立つようになったとはいうものの、本質的には極めて近く、やはり同一群と判定できるように思われるのである。

次に、陽明文庫本は如何であらう。肖柏—三条西家本群にこの陽明文庫本は加えられるだろうか。成程、三本を比較してみると、互いに異同数が少なく、就中三条西家本にとっては、同一群とみなしえた肖柏本より陽明文庫本との異同数の方が、僅差ではあるが、少なくなっている。可能なように思われる所以であるが、但し問題がある。というのは、陽明文庫本には次に示す如き異同例もみえているからである。

①ふりせぬへ一〇三二②▽——ナシへ陽・池・国▽

② 心もとなく△一〇三六③▽——ナシ△陽・池・国▽

③ おはしましし二条の宮にそすみ給ひめみやの△一〇六七⑩▽——ナシ△陽・池▽

④ わたらむも△一〇六九⑬▽——ナシ△陽・池・国▽

⑤ とうらみきこえ給夜いたく△一〇七一①▽——ナシ△陽・池▽

⑥ おほやけわたくしの事にふれつゝかすもなく△一〇七一⑩▽——ナシ△陽・池・国▽

⑦ きんも△一〇八五⑭▽——ナシ△陽・池・国▽

⑧ 程に△一〇九二⑦▽——ナシ△陽・池・国▽

右は、陽明文庫本と池田本（そして時には国冬本もこれに加わる）とが一致して欠文の形をとり、他の青表紙系諸本と対立している例である。かかる例は、これを一字だけの異同にまで拵げれば、その数は倍増する。

更に次の如き訂正例もある。

⑨ あかぬ△一〇三五③▽——あかぬ△陽▽——あはぬ△池▽

⑩ せうとなる△一〇六八⑬▽——^{せうと}△陽▽——せうと△池・国▽

⑪ いとよくをしへきこえ給にすこしもてつけ給へりかやうの事を△一一〇九⑩▽——かやうのこと△横▽——ナシ△陽・国▽
おしへきこえ給にすこしもてつけ給へりかやうの事を

⑨⑩は、陽明文庫本が訂正によって池田本（或いは国冬本とも）に一致したものの、⑩は、今度は陽明文庫本と国冬本とが「いとよう……かやうの事を」までの本文を欠き、池田本の訂正前の本文が陽明文庫本や国冬本のそれと一致していたものである。

かかる訂正例が共通し、更には前述した①⑧の如きかなりの字数に及ぶ共通の欠文もみられるのである。これらを単なる偶然の結果として無視することは出来ないのではあるまいか。これらの諸例は、むしろ、陽明文庫本・池田本・国冬本相互の間、或いはその書本の段階でかもしれないが、やはり何らかの結びつき——例えば共通の書本から始まっているというような事実——があったのではないかという推測を招く事例として、留意しておくべきもののように思われる。先に同一群と判定しえた肖柏本と三条西家には、両本以外の青表紙諸本との異同の中にかかる特徴的な事例は見られなかった。ところ

こり得るだらうとは思ふ。しかしながら十二本の諸本の中で互いに親しい二つの本文が存在するならば、その二本の独自異

| <国冬本> | | <池田本> | | <横山本> | | <御物本> | |
|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|
| 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 |
| 陽明文庫本 | 528 | 陽明文庫本 | 307 | 陽明文庫本 | 370 | 三条西家本 | 338 |
| 三条西家本 | 645 | 横山本 | 447 | 三条西家本 | 409 | 陽明文庫本 | 349 |
| 大島本 | 648 | 三条西家本 | 458 | 大島本 | 413 | 大島本 | 351 |
| 明融本 | 649 | 明融本 | 464 | 明融本 | 420 | 明融本 | 364 |
| 肖柏本 | 664 | 大島本 | 466 | 池田本 | 447 | 肖柏本 | 389 |
| 御物本 | 759 | 肖柏本 | 501 | 肖柏本 | 448 | 横山本 | 497 |
| 横山本 | 766 | 御物本 | 567 | 御物本 | 497 | 池田本 | 567 |
| 池田本 | 769 | 国冬本 | 769 | 国冬本 | 766 | 国冬本 | 759 |

第五表 御物本・横山本・池田本・国冬本と他の青表紙諸本との間の本文の異同数

が陽明文庫本にはそれがあるのであって、そのために、よしんば陽明文庫本が異同数の上では肖柏—三条西家本群と近接しているにせよ、これらと同群とみなすことは、やはり躊躇されるのである。

結局のところ、陽明文庫本は、大島—明融本群とも肖柏—三条西家本群とも近接しており、のみならずかかる二群とはやや異質とみられる池田本や国冬本に対しても、部分的にはあるが強い結び付きをみせているのであって、どの群にも近いがどの群にも入れられない独自の一本であるかに思われる。

本帖で取り扱った九種の写本のうち五本については既に述べた。残る四本、即ち御物本・横山本・池田本・国冬本についてだが、結論を先に述べるならば、この四本は各々固有の本文を有しており、これらを更にいくつかの系統群に細分するのは無理なようである。

というのは、四本各々に対する諸本の異同数を少ない順にあげてみると、第五表のようになるからである。

この表によれば、いずれも本文の異同数の最も少ないのは陽明文庫本や三条西家本で、当の四本相互間の本文の異同数は、これらよりも遙かに大きい。

また独自異文数をみると、第六表のようになる。

ここでいう独自異文とは、あくまでも筆者が取り扱った十二の本文の中で、一本のみ他とは異なる表現をとった本文を指しており、従つてもしこれに新たな十三番目の一本を加え検討し直せば、その数値が変動することも起

第六表 独自異文数

| 諸本名 | | 異 自 数 文 |
|-----|-----|------------------|
| 大島 | 本本 | 38 |
| 明融 | 本本 | 18 |
| 肖柏 | 本本 | 61 |
| 三条 | 家本 | 39 |
| 陽明 | 文庫本 | 22 |
| 御物 | 本本 | 160 |
| 横山 | 本本 | 158 |
| 池田 | 本本 | 177 |
| 国冬 | 本本 | 414 |

めにも、ここで独自異文数という観点からの分析を加えた次第である。

さて第六表によれば、これまでに検討してきた大島本以下の諸本の独自異文の数がいずれも二桁台に止まっているのに対して、御物本等四本の独自異文の数はいずれも三桁台にはね上っており、就中国冬本は四一四と、三桁台の四本の中でも他を圧倒した数値となっている。結局この四本は個々別々で、群に分けることの不可能な青表紙本とみてよいのであろう。

但し注意したいのは池田本と横山本との関係である。第五表に於いて、御物本・横山本・池田本・国冬本の四本は、四本相互の異同数より陽明文庫本や大島・明融本群、肖柏・三条西家本群との異同の方が少ないという傾向があったのに対して、例外的に、池田本の第二位に横山本が、また横山本の第五位に肖柏本を超えて池田本がきている。これらのことは、その両本の間に何かつながりがあることを意味するのだろうか。

この点に注目して諸本の異同状況を眺めてみると、池田本と横山本の二本だけが同じ本文をもち、他の諸本と対立している所謂「共通異文」の数が目立つようである。そこで試みに、十二本の全異同例（一七五七）の中から、池田本とある一本と、二本のみ本文が共通していて、それ以外の十本の青表紙諸本と対立している事例を数えてみると、第七表のようになった。

一見して明らかなく、池田本と横山本との間の、前述の意味での共通異文数は、池田本と他本とのそれを圧倒して多い。とすると、池田本と横山本との間には、部分的かもしれないが、何がしかのつながりがあったのではないかと思われる。

〈元和九年本〉

〈伝嵯峨本〉

〈黒川文庫本〉

| 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 |
|-------|-----|-------|-----|-------|-----|
| 肖 柏 木 | 304 | 三条西家本 | 247 | 三条西家本 | 233 |
| 大 島 本 | 331 | 大 島 本 | 294 | 大 島 本 | 283 |
| 三条西家本 | 337 | 明 融 本 | 306 | 明 融 本 | 298 |
| 陽明文庫本 | 352 | 肖 柏 本 | 309 | 肖 柏 本 | 306 |
| 明 融 本 | 359 | 陽明文庫本 | 316 | 伝嵯峨本 | 317 |
| 伝嵯峨本 | 383 | 黒川文庫本 | 317 | 陽明文庫本 | 320 |
| 黒川文庫本 | 394 | 元和九年本 | 387 | 元和九年本 | 394 |
| 池 田 本 | 466 | 御 物 本 | 434 | 御 物 本 | 419 |
| 御 物 体 | 482 | 池 田 本 | 450 | 横 山 本 | 489 |
| 横 山 本 | 527 | 横 山 本 | 502 | 池 田 本 | 538 |
| 国 冬 本 | 743 | 国 冬 本 | 726 | 国 冬 本 | 707 |

| 諸本名 | 共通異文数 |
|-------|-------|
| 大 島 本 | 0 |
| 明 融 本 | 1 |
| 肖 柏 本 | 1 |
| 三条西家本 | 1 |
| 陽明文庫本 | 6 |
| 御 物 本 | 3 |
| 横 山 本 | 65 |
| 国 冬 本 | 0 |

第七表 池田本と他の青表紙諸本との共通異文数

第八表 黒川文庫本・伝嵯峨本・元和九年本と他の青表紙諸本との間の本文の異同数

しかしながら、その共通異文の性質（換言するならば、池田本と横山本だけが共有している本文と、残る十本のこれとは対立している本文とを比較してみた場合の異同の大きさ。対立の度合が強ければ強い程、他の十本から離れた両本相互間の共通性ないし結び付きも、同じく強まってくるのは当然のことである）を分析してみたところ、六五例にわたる共通異文の殆どは接頭・接尾辞や付属語程度の異同であるか、または自立語の異同でも僅か一音ないしは一字の転化にとどまるものばかりであった。これらは、考えようによっては、単なる偶然の一致とも受けとられよう。部分的なつながりはあるものの、これを以て池田本と横山本とが同一の群であるとは判定できなかつた所以である。

さて、本帖に於ける九種の写本を以上の如く分類してみるならば、黒川文庫本をはじめとする近世初期の三刊本は、これら諸本と各々どのような位置関係をとるものだろうか。三刊本の本文と他の青表紙写本との本文の異同数をみてみると、第八表のようになる。三本いずれも肖柏―三条西家本群との間の異同数が最も少ない。就中、黒川文庫本と三条西家本との間が最も近い。この結果は「桐壺」の巻の場合の結果とも一致する。

但し「桐壺」の巻では、大島―明融本群（①群）の対極に肖柏―三条西家本群（②群）があり、伝嵯峨本と元和九年本が②に近接していたのに対して、黒川文庫本だけは②と共に①にも近接していた

わけであるが、本帖では、そもそも①と②の両群が近接してしまっているために、そうした傾向は抽出しにくいようである。他の二刊本より黒川文庫本の方が、いずれの群に対する異同数も少なくなっており、その点では「桐壺」の巻での結果と一致しているとはいうものの、僅差であり、結局のところ、この問題については次の「若菜下」での結果を俟った方がよいかもれない。

若菜下

本帖で使用した本文は、『源氏物語大成』校異篇所収の大島本（底本）・横山本・榊原家本・池田本・陽明文庫本・肖柏本・三条西家本の七本と明融本・黒川文庫本・伝嵯峨本・元和九年本とを合わせた計十一本である。これら十一本の異同の総数は一六四二。全体的に小異というべきものが多く、特に目立った異同はない。諸本相互に類似しているという印象がある。

かかる十一本を群に分別することが可能か否か。はじめに「桐壺」「若菜上」で同一群と判定しえた大島本と明融本の関

第九表

大島本と他の青表紙諸本の間の本文の異同数

| 諸本名 | 異同数 |
|-------|-----|
| 明融本 | 95 |
| 肖柏本 | 193 |
| 三条西家本 | 302 |
| 横山本 | 353 |
| 陽明文庫本 | 371 |
| 榊原家本 | 393 |
| 池田本 | 443 |

第十表

大島本と明融本の異同の分析

| (C) | (B) | | (A) |
|-----|-------------------|-------------------|-----|
| | (B ₂) | (B ₁) | |
| 0 | 38 | | 57 |
| | 14 | 24 | |

係から検討してみることにしよう。大島本に対する諸本の異同数を少ない順に挙げると、第九表のようになる。

明融本が最も少なく九五例で、その数値は他本の異同数に比べて抜群に少ない。そこでその九五例を前例と同様に分析してみるに、第十表のようになる。接頭・接尾辞の有無や付属語の脱落・書き違え等は、転写過程に於いて自然に発生しやすいものであるが、その種の誤脱かと見うるもの(A)が五七例と、全体の半数以上を占めている。また(B)の自立語の異同は三八例あるが、そのうちの二四例は、その自立語の中の僅か一字だけの異同、即ち(B₁)で、二文節以上にわたる異同即ち(C)に相当する例はない。つまり九五例中、形の上では小異とすべき(A)及び(B₁)の合計が八一例にもなるわけで、逆に

歴然とした異同——場合によると意識的に作られたかとも思われる異同——は、僅か十四例しかない。このような大島本と明融本とは、同一群と見做さざるを得ない。しかも両本間の親近度は、「若菜上」に於ける両本間のそれよりも強いと判定しうるように思う。

次に、明融本について大島本との異文が少ない、従って大島本と互いに近い関係にあると思われる肖柏本について考える。相互間の異文数が少ない点からみるならば、肖柏本も大島——明融本群に加えることが出来そうではあるが、具体的な数値をみると、明融本の異同が九五であったのに対して、肖柏本は一九三と倍以上もあり、躊躇される。肖柏本は、他の諸本と比べると、大島——明融本群に最も近い本文として位置付ける以上のことは出来ない。

次に、「桐壺」「若菜上」で同群と見ることのできた肖柏本と三条西家本は、本帖ではどうなのであろうか。両本各々に對する諸本の異同数を少ない方から順に挙げると、第十一表のようになる。

| 〈三条西家本〉 | | 〈肖柏本〉 | |
|---------|-----|-------|-----|
| 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 |
| 明融本 | 266 | 明融本 | 187 |
| 大島本 | 302 | 大島本 | 193 |
| 肖柏本 | 311 | 三条西家本 | 311 |
| 横山本 | 449 | 陽明文庫本 | 368 |
| 陽明文庫本 | 477 | 横山本 | 386 |
| 榊原家本 | 498 | 榊原家本 | 432 |
| 池田本 | 533 | 池田本 | 472 |

第十一表 肖柏本・三条西家本に対する諸本の異同

となり、遙かに多い。だからこの数値だけから考えるならば、肖柏本は、大島——明融本群に対してさえ類別を異にすると考えたのだから、その両本に対してよりも遙かに多くの異同数を有する三条西家本を肖柏本と同群とみなすことは不可能だということになる。

しかし一方から言えば、異同の質という点も考慮に入れるべきであらうから、この異同数三一一を分析した結果を第十二表に記してみた(猶、参考までに、この両本を同群とみなし得た「若菜上」に於ける異同状況を併記しておいた)。

第十二表によれば、まず異同総数は「上」より「下」の方が多し。これは本文の分量による。但し注意したいのは異同の内容である。「下」は「上」より分量が多いのだから(A)(B)(C)各項目の数値が高くなるのは当然のことだが、実状は(A)は殆ど変わらず、(B)と(C)が増加しているのである。のみならず、比較的大きな

第十二表 「若菜上」「若菜下」に於ける肖柏本と三条西家本との異同の分析

| | | 若菜上 | 若菜下 |
|------|-------------------|-----|-----|
| 異同総数 | | 241 | 311 |
| (A) | | 150 | 155 |
| (B) | (B ₁) | 63 | 96 |
| | (B ₂) | 27 | 57 |
| (C) | | 1 | 3 |
| 独自異文 | 肖柏本 | 61 | 58 |
| | 三条西家本 | 39 | 82 |

異同と考えられるもの、即ち(B₂)の「自立語の異同で、しかもその一字だけの相違ではない異同」と(C)の「二文節以上にわたる異同」が、各々五七と三となっており、「若菜上」では二七と一とであったものが倍増している。言ってみれば、「下」に於ける両本の異同は、それだけ転化の度合が大きくなったということの意味するのではあるまいか。

次に独自異文は、肖柏本では「若菜上」より「若菜下」の方が僅かであるが減少している。ところが三条西家本では逆に「若菜下」で多くなっており、しかもその数量は「上」の三九が「下」では八二で、二倍以上になっている。このことと先の第十一表による結果、即ち、三条西家本と青表紙諸本との間の異同数が、肖柏本と青表紙諸本との間の異同数よりも、全体的としてかなり高くなっている点とを勘案するならば、「若菜下」に於ける三条西家本は、他の諸本とはかけ離れたやや独自の本文をもっているらしく思われ、そのことが肖柏本の本文との乖離を招いているのかという推測も可能かと思うのである。

以上のようにみてくるならば、本帖に於ける肖柏本と三条西家本とは、本文異同の量的な面からも又質的な面からも、同群としてまとめてしまうにはどうしても無理が生じてしまうようである。ここではやはり、よく類似した本文として押さえておくのが妥当かと思う。

では、残る四本については如何であらうか。横山本・池田本・榊原家本・陽明文庫本の各本文と他の青表紙諸本との異同数を示したのが第十三表である。この表から直ぐに分ることは、横山本と池田本との関係で、この両本は相互の異同数が最も少なく、近い関係にある。殊に池田本と横山本との間の異同数二七三は、他の諸本間の異同数が三〇〇から六〇〇台に及ぶのに比べて、格段に低いことは注目すべきことである。

また、本帖に於ける都合十一本の諸本間の本文異同の総数一六四二例中、池田本と横山本の二本だけが共通し、他の九本と本文の対立している用例、即ち共通異文の数は、一二五例に及んでいる。参考までに、他の諸本が池田本と二本だけの共通の異文を有している数を第十四表にあげてみよう。

と三条西家本にしても、各々五八・八二と、

大島―明融本群について少ない数値となっている。これに対して池田本と横山

<陽明文庫本>

<榊原家本>

<池田本>

<横山本>

| 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 |
|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|
| 明融本 | 352 | 明融本 | 360 | 横山本 | 273 | 池田本 | 273 |
| 肖柏本 | 368 | 大島本 | 396 | 明融本 | 414 | 明融本 | 313 |
| 大島本 | 371 | 肖柏本 | 432 | 大島本 | 443 | 大島本 | 353 |
| 三条西家本 | 477 | 三条西家本 | 498 | 肖柏本 | 472 | 肖柏本 | 386 |
| 横山本 | 523 | 横山本 | 526 | 三条西家本 | 533 | 三条西家本 | 449 |
| 榊原家本 | 564 | 陽明文庫本 | 564 | 陽明文庫本 | 594 | 陽明文庫本 | 523 |
| 池田本 | 594 | 池田本 | 619 | 榊原家本 | 619 | 榊原家本 | 526 |

第十三表 横山本・池田本・榊原家本・陽明文庫本と諸本との間の異同

第十四表 諸本の池田本に対する共通異文数

| 諸本名 | 共通異文数 |
|-------|-------|
| 大島本 | 0 |
| 明融本 | 0 |
| 横山本 | 125 |
| 榊原家本 | 2 |
| 陽明文庫本 | 11 |
| 肖柏本 | 1 |
| 三条西家本 | 1 |

一見して明らかな如く、池田本と横山本との間の共通異文数が他を圧倒しているものであって、これも又両本の結び付きの強さを示す一資料とみられるだろう。この両本は「若菜上」でも六五という、他に比べれば圧倒的に高い共通異文数を示していた(第七表参照)。この傾向は、本帖に入っても変わらず、それほどどころかいよ／＼拍車がかげられたようである。

しかし、いくら近い関係にあるといっても、この池田本と横山本とを一つの群としてまとめうるというわけではない。何といても、両本の本文の間にある二七三という異同数の大きさがある。この数値は、よく類似していると位置付けられた肖柏本と三条西家本との間の異同数三一よりは少ないが、同群と認定しえた大島―明融本間の異同数九五には遠く及ばない。

また独自異文の問題もある。第十五表によれば、まず同群である大島本と明融本の独自異文数は、各々三一・一六と、諸本の中でもやはり群を抜いて少ない。同群とまで認定できないがよく類似した本文として位置付けられた肖柏本

第十五表 独自異文数

| 諸本名 | 独自異文数 |
|---------|-------|
| 大島本 | 31 |
| 明融本 | 16 |
| 肖柏本 | 58 |
| 三条西家本 | 82 |
| 横山本 | 84 |
| 池田本 | 165 |
| 陽明文庫本 | 202 |
| 榊原家本 | 257 |
| (黒川文庫本) | 192 |
| (伝嵯峨本) | 134 |
| (元和九年本) | 144 |

してしまっているのだが、池田本の訂正によって横山本から離れてしまったものである。池田本については原本を閲覧することが出来なかつたので、二十の訂正箇所についても、池田本成立当初からのものなのかそれとも後代の書き入れによるのか、不明である。

ともあれ、かかる訂正といい、独自異文数といい、更には第十三表にみられる如く、池田本と諸本との各異同数が、横山本と諸本との各異同数に比べて全て一まわりほど多くなっていることといい、横山本と池田本との結びつきは、応々にして池田本の方から破られる傾向にあるようである。この両本は、横山本が鎌倉中期、池田本が鎌倉末から吉野時代にかけて成立したものであらうとされており、室町時代、三条西家学の出現で一つの大きな転期を迎えたかとされている青表紙本の、古い姿を伝える本文の一つとされている。それだけに両本の結びつきに対しては大きな期待が持たれたのであるが、本帖に於いては一群として扱うのはやはり無理なことのように思われる。部分的には、かなり強い脈絡が本文に認められることがあるという程度にとどめておきたい。

最後になったが、榊原家本と陽明文庫本とは、他の諸本の本文と比べると、共に独自異文数が多く、その数二〇〇を超え。両本それぞれ独自の本文で、特にどの群に属するということはないらしい。

以上八種の「若菜下」伝本間の本文の関係をこのように理解した上で、近世初期の三刊本（黒川文庫本・伝嵯峨本・元和

本の場合はどうかといえ、横山本の八四例こそ三条西家本とほぼ等しいとはいふものの、池田本の方は一六五例と倍増してしまっているのである。

また、先に池田本と横山本との共通異文数が一二五例に及ぶことを示したが、実は、本行だけをみるならば、この数値は更に二十ほど増加されるのである。この二十例はいずれも、本行だけをみるならば、横山本と池田本の二本だけが同じ本文をもち他の九本と対立

九年本)が、この八種の伝本とどのように関わっているのかをみることにする。まず、これら三刊本各々の本文と、既述した八本との間の異同数を少ない方から順に表示すると第十六表のようになる。

| 〈元和九年本〉 | | 〈伝嵯峨本〉 | | 〈黒川文庫本〉 | |
|---------|-----|--------|-----|---------|-----|
| 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 | 諸本名 | 異同数 |
| 明融本 | 334 | 明融本 | 228 | 明融本 | 351 |
| 大島本 | 337 | 大島本 | 231 | 大島本 | 356 |
| 肖柏本 | 352 | 三条西家本 | 389 | 三条西家本 | 372 |
| 三条西家本 | 368 | 元和九年本 | 430 | 肖柏本 | 391 |
| 伝嵯峨本 | 430 | 黒川文庫本 | 441 | 伝嵯峨本 | 441 |
| 黒川文庫本 | 506 | 横山本 | 454 | 元和九年本 | 504 |
| 陽明文庫本 | 507 | 陽明文庫本 | 461 | 横山本 | 549 |
| 横山本 | 526 | 肖柏本 | 472 | 陽明文庫本 | 567 |
| 榊原家本 | 576 | 榊原家本 | 496 | 榊原家本 | 604 |
| 池田本 | 606 | 池田本 | 546 | 池田本 | 640 |

第十六表 黒川文庫本・伝嵯峨本・元和九年本に対する諸本の異同

この表によれば、三刊本とも最も近いのは大島―明融本群の本文である。中でも伝嵯峨本の同群に対する異文数が最も少ない。この点は、例えば「桐壺」「若菜上」の三刊本が、肖柏本や三条西家本の本文と最も近かったことは筋を異にしている。というよりは、反対の群に近いということである。しかし黒川文庫本の場合、この本の本文と、明融本や大島本との間の異同数及び肖柏本や三条西家本との間の異同数との間には、決定的な区画線をひくことは出来ないというべきなのであろう。

猶、黒川文庫本が、「桐壺」では肖柏―三条西家本群と共に大島―明融本群とも近かったこと、また「若菜上」では大島―明融本群との間の異同数が最も少なかったこと等を考えれば、そこに黒川文庫本の一つの特徴を見出せるであろうと思われる。決定的なことは全帖を検討した上でなければ言い得ないが、ここまでの調査の範囲から推測すると、黒川文庫本の本文は大島本や明融本と割に近い本文を持っているかに思われる。